

新規就農者からステップアップ！

～認定農業者として規模拡大～

境港市

岩竹 保志

1. はじめに

○ 白ネギの栽培を始めた経緯

私が、独立自営就農して白ネギ栽培を始めて今年で8年目です。就農前は県外で航空自衛隊の仕事をしたのち、20代後半から、■■■■青果の栽培部門で従業員として、主に白ネギの栽培管理に約7年間携わってきました。

■■■■青果で勤務しているときに、白ネギ農家で研修をしている県外出身の研修生と知り合い、その一生懸命学ぶ姿や、白ネギに対する思いに刺激をもらい、自分も自分の故郷である鳥取県の白ネギ栽培に貢献したいと思い、就農を決意しました。

そして、■■■■青果で培った経験、知識をもとに平成26年に白ネギ農家として境港市で新規就農者となりました。

高校を卒業して、県外の自衛隊に就職をした際、県外の方々には「鳥取といえばカニと砂丘」というイメージしかないことを知りました。

また、自分自身も、高校時代に通学中の境線の列車から眺める畑で栽培される白ネギが鳥取県の特産品であることすら、■■■■青果に就職するまでは知りませんでした。

今は、こうして白ネギの栽培に携わることになり、産地の担い手の一翼として働くことが出来ることを誇りに思います。

○ 就農後の取組・今後の展望

就農後は■■■■青果で年間約7haのネギを栽培に携わり、機械作業等は慣れていたため、白ネギの栽培には自信がありました。

しかし、経営面や圃場の作付け計画などは、■■■■青果の見様見真似だったため、当初は土づくりも力不足で、開墾した農地をすぐに使っていたため、地力が足りずにネギの質が悪かったり、途中で枯れてしまうなどもありました。

さらに栽培についても、独立してから自分で考えながらするとなると不十分で、インターネットや書籍などで見つけた目新しいものに無計画に手を出し、生育ムラが生じることも多々ありました。

そのため、独立しての就農後は、なかなか安定した売り上げがあげられず、収入も不安定でした。

その都度、元勤務先であり現出荷先でもある■■■■青果の社長のアドバイスを受けながら、それを基礎として自分の中の計画や経営の修正、プランの再構築をしていくことで、徐々に安定した周年出荷ができるようになりました。

また、県や市、農協、近隣農家の方々の協力もあり、就農当初に立てた売上や生産量の計画もスムーズに達成することが出来ました。

現在就農から8年が経過し、周りを見ると新規就農者は増えてはいるものの高齢により

引退する農家はそれ以上に多く、周辺の荒廃地、遊休農地が増加しています。

最近は、引退した農家の方から、その畑の管理を任されることも多くなりました。

これらの遊休農地を耕作地として有効活用し、規模拡大を目指すことができたらと強く思い、令和4年に認定農業者を取得しました。

昨年の大雨災害もありましたが、これからの白ネギ作りは災害レベルの異常気象をはじめ、原材料の高騰、さらに大きな産地との競合も厳しくなっており、一層売り上げを上げることが困難となります。

その中で、いかに「鳥取の白ネギ」を手にとってもらえるかは、今後の産地を担っていく今の私たち、担い手に掛かっていると思います。

「農家は一人でできるが、農業は地域でするものだ」という先達者の想いと技術を後継し、近隣農家との知識・技術の共有、それらを次世代に繋ぐことで鳥取県の特産物として胸をはって他県にアピールできるよう日々精進していきたいと思っています。

本プランを活用することで、自身の経営を発展させ、鳥取県という白ネギの産地を支えていきたいと考えます。



図1. 圃場の様子

2. 現状と課題

i. 現状の経営状況

▼現状 (R3 年)

・経営面積

作目	面積(a)	生産量(kg)
春ネギ	38	14,820
夏ネギ	43	14,190
秋冬ネギ	67	10,050
計	148	39,060

・労働力

氏名	年齢	続柄	担当業務	年間農業従事日数(日)
岩竹 保志		本人	全般	330
		父	調製	120
		雇用	調製	100

・保有機械

名称	能力	数量	導入年	導入方法
	6ps	1	H27	就農条件整備事業
	3ps	1	H27	就農条件整備事業
	2,300 本/時	1	H27	就農条件整備事業
	650 本/時	1	H27	就農条件整備事業
	5ps	1	H27	就農条件整備事業
		1	H27	就農条件整備事業
	23ps	1	H28	就農条件整備事業
	8ps	1	H29	就農条件整備事業
	200 穴・1 条	1	H29	就農条件整備事業
	自走式・5.0ps	1	H27	自己資金
	刈刃幅 1,210mm	1	H28	自己資金
	歩行型	1	H30	自己資金
	7ps	1	R02	自己資金
		1	R02	自己資金
	50cm 幅	1	R02	自己資金

ii. 現状の取組状況

これまで私は、下記の取組を行い、工夫して営農してきました。

- ・基本的な施肥設計
- ・防除計画・作業マニュアルの作成
- ・大規模農家を参考にした機械導入
- ・細々とした便利農具などを活用し作業を簡略化、省力化するなど

作業場においても、出荷調整機械を一式揃え、作業動線を考慮したレイアウトの改善、作業の簡略化、役割分担もこの7年間で構築してきました(図2)。



図2. 作業動線を考慮した作業場のようす

3. 現在の課題とその解決策

一方で、①～⑤のような課題があります。

これらの課題解決に向けて、本プランも活用しながら、反収約1,200cs/10aを目指すことで、収入や所得の向上を目指します(表1)。

表1. 現在の収量と目標年における収量目標

	R3 (現状)		R4		R5		R6		R7		R8 (目標年)	
	面積 (a)	収量(kg) 反収 (cs/10a)	面積 (a)	収量(kg) 反収 (cs/10a)	面積 (a)	収量(kg) 反収 (cs/10a)	面積 (a)	収量(kg) 反収 (cs/10a)	面積 (a)	収量(kg) 反収 (cs/10a)	面積 (a)	収量(kg) 反収 (cs/10a)
春ネギ	38	14,820 (1,300)	40	15,200 (1,267)	40	15,200 (1,267)	50	19,000 (1,267)	60	23,400 (1,300)	60	23,400 (1,300)
夏ネギ	43	14,190 (1,100)	40	12,000 (1,000)	45	13,500 (1,000)	45	14,400 (1,067)	50	16,500 (1,100)	50	16,500 (1,100)
秋冬ネギ	67	10,050 (500)	70	22,400 (1,067)	80	26,400 (1,100)	90	31,500 (1,167)	100	36,000 (1,200)	100	36,000 (1,200)
合計	148	39,060	150	49,600	165	55,100	185	64,900	210	75,900	210	75,900

① 秋冬ネギの収量向上（気象災害に対応した白ネギ栽培）

従来、秋冬ネギは 1,000cs/10a 程度の収量が安定して確保できていますが、R3 の秋冬ネギでは 7 月の大雨災害の影響も受け、500cs/10a と収量が大幅に減収してしまっています。

昨年レベルの大雨災害が毎年続くとは考えられませんが、今後は、大雨被害にあっても安定した収量の確保を行うことが経営の安定には必須です。

収量向上につなげるための大雨対策として、滞水に強い品種選定や排水対策を重点的に行います。

品種の選定に関しては、農協や普及所に相談し、アドバイスをいただきます。

排水対策については、自己資金でユンボを導入し、側溝に溜まった砂の除去や、明渠作成、圃場構造自体の改善を行います。

具体的には、風などで圃場の外側に砂がたまり、圃場の中央が低くなり、水が溜まりやすくなっているため、ユンボなどで圃場の中央に砂を盛り、畑の外の側溝へとスムーズな排水ができるような畑へと構造改善を行います。

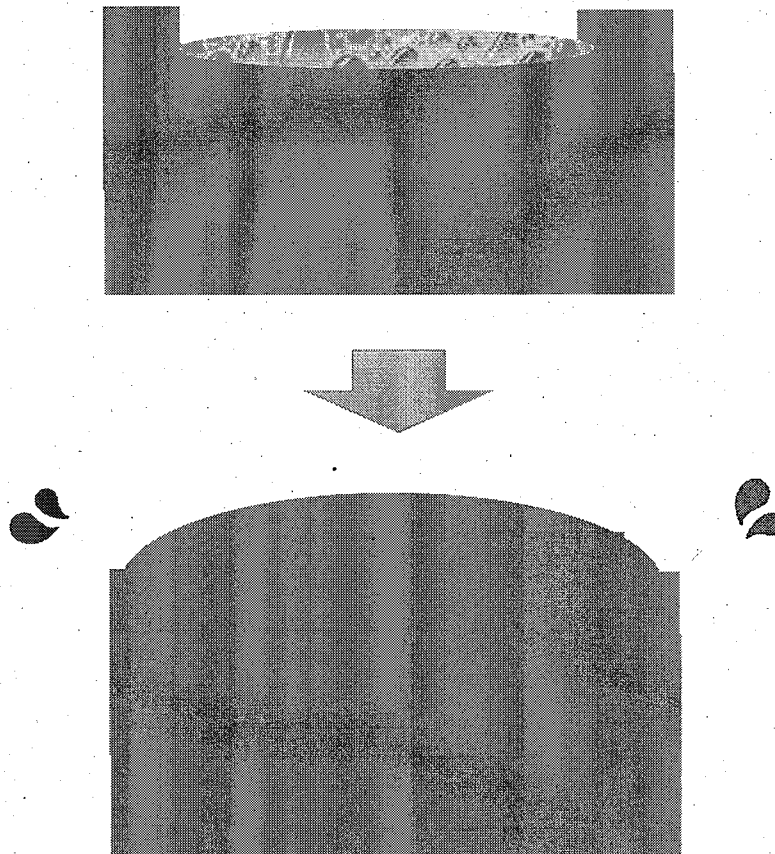


図 3.圃場の構造改善策

② 育苗スペースの不足

現在使用している、6×30mの育苗ハウス(図4,5)では、繁忙期である秋冬ネギを育苗する面積が不足している状況です。

本プランの目標年の収量を達成することは、現在使っているハウスの面積では困難です。

また、現在使用している育苗ハウスは青果から賃貸しています。しかし、現在青果は、規模拡大の意向があるため、近年中に育苗ハウスを返却して欲しいというお話がありました。そのため、自身で新たな育苗ハウスを確保しなければなりません。

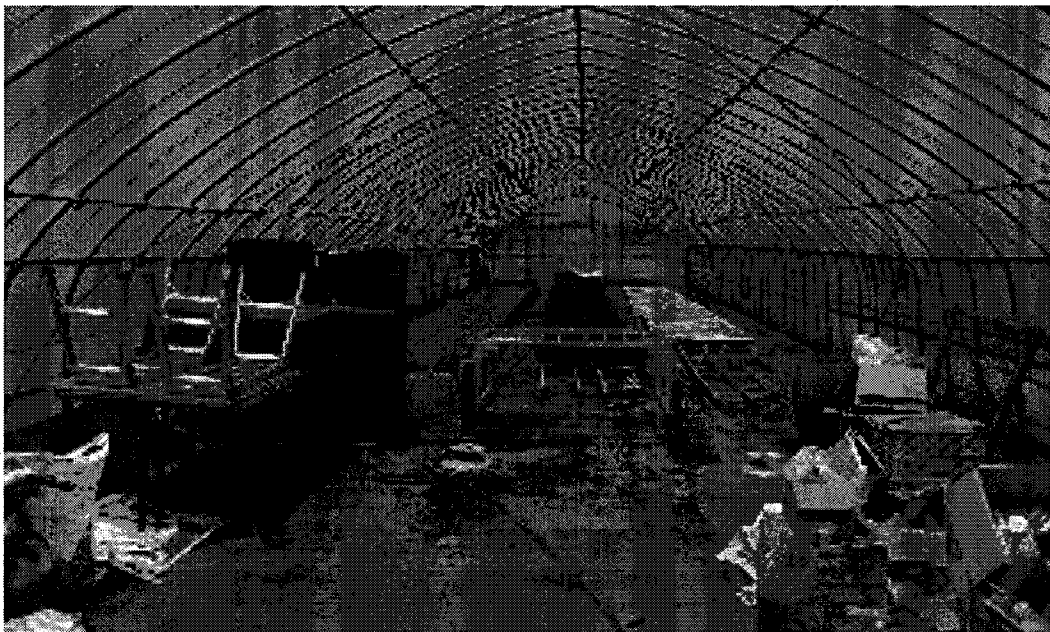


図4. 現状の育苗ハウス(賃借)のようす

本プランの目標年には、表2の赤い点線内で表している夏秋ネギと、秋冬ネギの育苗が重なる3月~4月ごろに育苗数がピークとなり、育苗トレイをハウス内に約780枚設置する必要があります(表2)。

しかし、現状の6×30mの育苗ハウス(図4,5)では、450枚しか、育苗トレイを設置することができず、経営面積の規模拡大の制限要因となっています。

それを解消するためには、ハウスの面積としては、6×47m規模の育苗ハウスを導入しなければ達成できません。(図6)

しかし、設置予定の農地(図7)の形状から、奥行きが47mのハウスを建てることは不可能であるため、作業幅も考慮し6×25mの育苗ハウスを2棟導入する計画です(図7,8)。

6×25mの育苗ハウスを2棟導入することで、目標年の面積を達成できるだけの育苗が可能となります。

	12月	1月	2月	3月	4月	5月
夏どり後半	30a(180枚)					
年内秋冬		60a(360枚)				
年明け秋冬					40a(240枚)	

表2. 目標年の育苗計画

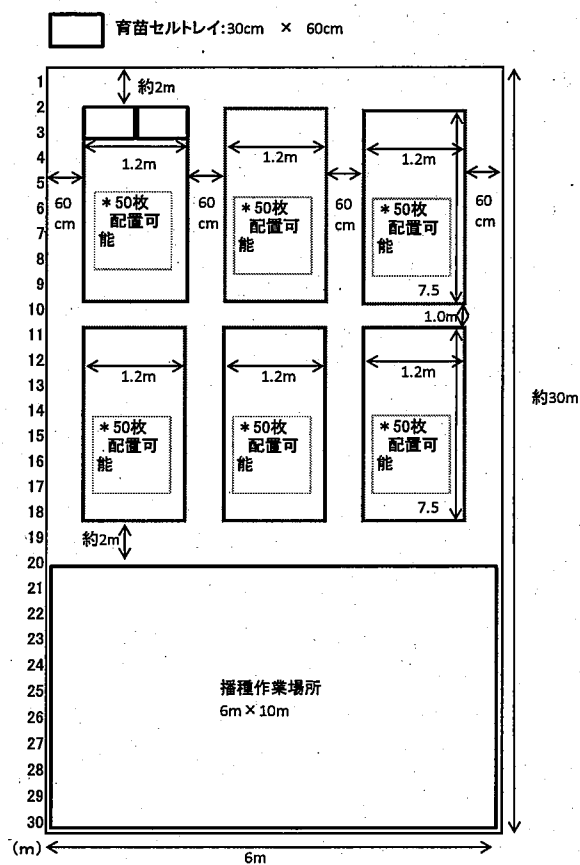


図5. 現状の育苗ハウス (賃借)

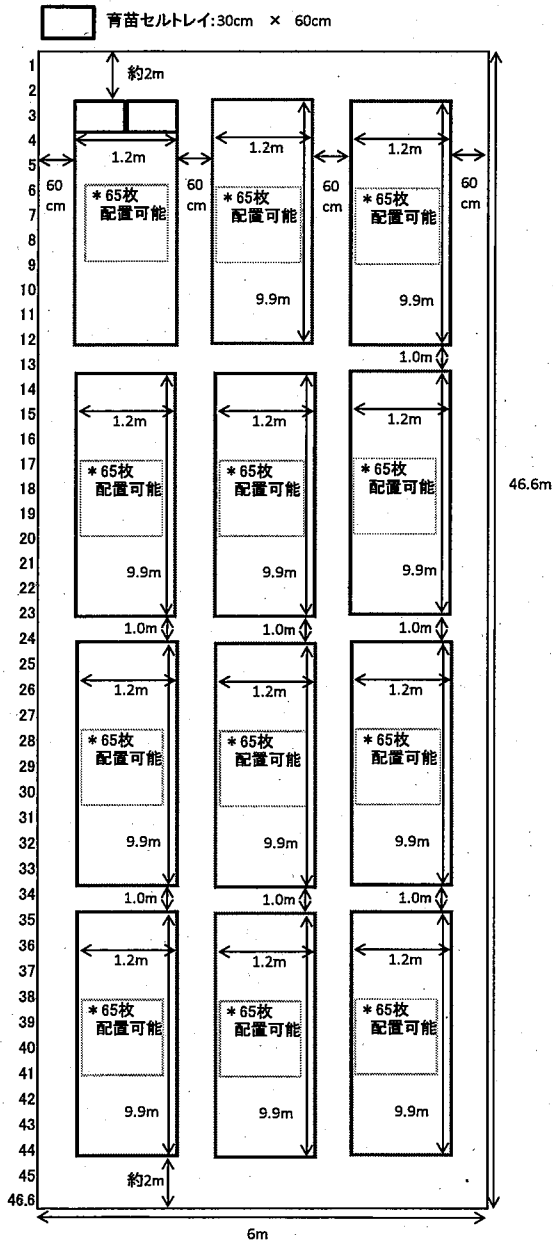


図 6. 必要規模の育苗ハウス

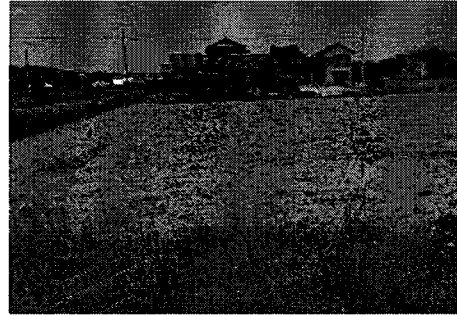


図 8. ハウス建設予定農地

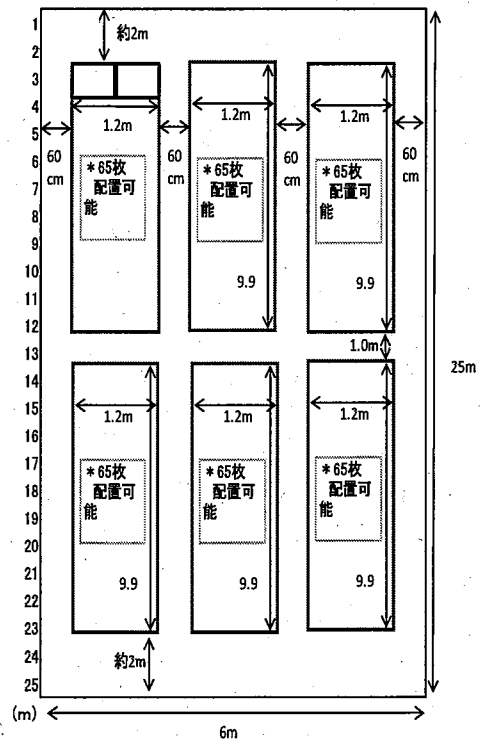


図 7. 導入予定の育苗ハウス

③ 播種作業および資材保管の不足

現在、■■■青果より賃借している育苗ハウスの空いたスペースにて播種作業を行っていますが(図4)、①で説明した通り、■■■青果にハウスを返却する必要があり、播種作業場が新たに必要となります。

また、機械の保管庫も■■■青果に間借りしているうえに、肥料などの資材保管場所については、現在はいくつかの農家のハウスや倉庫を間借りしている状況で、本拠地である保管庫がないため、様々な場所に資材や機械を取りに行くことで、時間のロスが生まれ、生産性が下がっている状況です。

さらに、間借りであるため、たくさんの資材を置くことができないため、必要最低限以上のストックができず、まとめ買いによる値引きでの経費削減は不可能です。

さらに、近年の気象状況による大雨被害などで、急遽管理作業で資材が必要になった際に、まとまった場所にまとまった数の肥料や農薬がないことは、緊急防除が必要な際などの観点から見ても、非常に非効率的な状態であると考えられます。

そのため、育苗ハウスに隣接した播種作業用兼資材保管用のハウス(図9)を設置することで、育苗ハウス返却後も問題なく播種作業を行うことができます。加えて、前述した非効率的な作業時間のロスも解消し、さらに拠点の一元化による効率的な営農が可能となる見込みです。

上記のことにより、経営のさらなる確立と、規模拡大が可能になると考えられます。

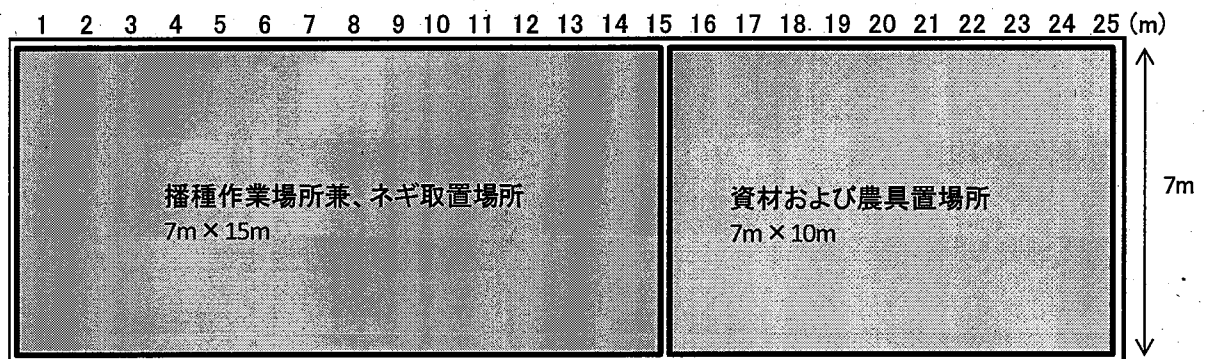


図9. 導入予定の播種作業用兼資材保管用ハウス

④ 各エリアごとの圃場の特性及び農地の分散

現在の耕作地は、大きく分けて4つのエリアに分かれています(表3)。

表3. 耕作エリアの概要

エリア	特性	借受面積
① 境港市	米子と異なる気候のため、米子エリアで気象災害等があった場合のリスク分散が可能。	60a
② 米子市	作業場のあるメインエリア。焼け畑が多い。 エリア内で圃場が点在している。 <u>※育苗ハウス・資材保管用のハウスの建設予定地。</u>	70a
③ 米子市	湿け畑。自身の栽培にあった圃場が多く、エリア内の面積を増やしたい	120a
④ 米子市	下水が近いが、排水対策を行えば使い勝手が良い圃場。	60a

弓浜地区は隣接する畑でも土質が異なり、水はけの良し悪しなどに影響すると言われ、地域が異なればその違いがより顕著になります。全作型を同じ地域で栽培することは、作業効率のうえでは利便性が良いと思われませんが、気象災害などがあった場合はネギに及ぼす影響も大きく、非常にリスクが高くなります。

そのため、米川を挟み中海側、日本海側に分かれるこの4つのエリアの圃場を使い分けながら引き続き白ネギ栽培を行っています。

一方、4つのうちの②・③はエリア内での圃場分散や引退された農家からの農地提供の声もあるため、集約化を図る計画です。

②のエリアは作業場があるためメインエリアとして使っています。

本事業で、育苗ハウスや格納用ハウスを建設するエリアも、このエリアです。

このエリアでは、周辺の引退された農家の方から農地を任されることもあるのですが、耕作放棄地も含まれているため利用まで、なかなか進みません。

そのため、自己資金でユンボを導入し、耕作放棄地の利用促進を図ります。

③のエリアは栽培しやすい圃場が多く、もう少し面積を広げることができたらと考えています。

現在、基盤整備事業も進んでいることから、この事業を活用し圃場確保に努めます。

上記のとおり、農地を各エリアの特性に合わせて作型や品種を変えて、利用することで、ロスが少なく、反収向上につながると考えられます。

また、農地を集約することやメインエリアであるエリアに育苗ハウスや格納用ハウスを建設することにより、移動時間の削減やまとまった栽培管理による、営農の効率化を進めていきます。

⑤ 雇用の不足と数年後の雇用体系問題

安定した経営には品質の向上と数量が必要と考えていますが、限られた作業時間で収益を賄うためには不安もあります。

現在、圃場作業は自身一人で担っており、今後規模拡大を行ううえで、その負担は増加することが考えられます。

また、自身の加齢による作業能力の低下により、これまでの作業水準の維持が困難になるかと思えます。

さらに、就農初期から支えてくれた父も高齢となりいつまで続けてもらえるかわかりません。

自身の負担軽減、そして何より高齢となる父の負担を軽減させながら、規模拡大を行っていくための対策として、5年後には表4、将来的には表5のとおりの雇用を考えています。

新たな人材を雇用するとなると、業務内容のスムーズな伝達・指導が課題となります。父が現役であるうちに作業を分担できる人材を雇い、父が指導・育成することが重要であると考えられます。

これまで自身一人で担ってきた圃場作業も可能な範囲で雇用を頼れたらと考えています。基本的な施肥設計や防除計画、作業マニュアル、季節ごとの注意事項と対策、畑ごとの履歴簿等はまとめたものがあります。

また、新規就農者同士の勉強会で得た新しい情報も自分なりに整理してあります。

これらの情報を活用し、雇用が入った後には、しっかりと指導・育成ができる準備が整っています。

そのため、下記の表5に示すように雇用を増やしたあとも、指導法には困らず、すぐに、規模拡大を実現できます。

これらの作業マニュアルや施肥計画、防除計画が充実しているため、雇用を増やすことで、効率化ができ、規模拡大や反収アップへとつながります。

表6のような受け入れ態勢が整うまでは作業内容の指導も含めて、父を頼りたいと思っています。

また、雇用予定の従業員Bは前勤務先の同僚であり、10数年の農業経験があるため、圃場での作業も即戦力として見込めます。

これまでの自身の経験をまとめたものを伝えながら、ネギ作りの知識を共有し、自身が休んでも作業が滞らないような体制を構築し、ゆとりをもち、規模拡大を行いながらも品質を落とさず、より良いネギの栽培に取り組んでいきたいと思っています。

表 4. 現状の作業体系 (R3)

	月	火	水	木	金	土	日	作業内容
本人	◎	△	◎	◎	◎	△	◎	作業全般
父	△	×	△	○	○	×	○	調製
従業員 A	×	×	×	◎	○	×	◎	調製

※◎：終日、○：半日、△：不定休、×：休日（以下の表も同様）

表 5. 5年後の作業体系 (R8)

	月	火	水	木	金	土	日	作業内容
本人	◎	△	◎	◎	◎	△	◎	作業全般
父	×	×	△	×	△	×	○	調製
従業員 A	×	△	×	◎	○	×	◎	調製
従業員 B	○	△	◎	◎	○	×	◎	作業全般

表 6. 将来的な作業体系(父のリタイア後)

	月	火	水	木	金	土	日	作業内容
本人	◎	△	◎	◎	◎	△	◎	作業全般
従業員 A	×	△	×	◎	○	×	◎	調製
従業員 B	○	△	◎	◎	○	×	◎	作業全般
パート	△	△	△	△	△	×	△	調製

表 7. 具体的な取り組みと役割分担

項目		R04	R05	R06	R07	R08	連携機関
面積拡大	集約に向けた開墾			○	○	○	本人・機構・市等
	富益基盤整備の利用			○	○	○	本人・県・市等
雇用体系 の見直し	労働時間の改善	○	○	○	○	○	本人
	雇用の増加	○	○	○	○	○	本人
作業施設 の拡充	育苗ハウスの導入	◎					本人・県・市等
	播種作業兼資材置場の導 入	◎					本人・県・市等

◎：がんばる農家プラン活用

表 8. 今後の機械施設導入計画

導入機械・施設名	事業費	R04	R05	R06	備考
育苗ハウス(6×25m)	1,900 千円	○			本プラン活用
育苗ハウス(6×25m)	1,900 千円	○			本プラン活用
格納用ハウス (7×25m)	2,400 千円	○			本プラン活用
ユンボ	1,000 千円			○	自己資金

4. まとめ

現状、経営に関して、5つの課題がありますが、がんばる農家プラン事業を活用しながら、下記のとおり課題を解決し、反収を向上させながら規模拡大を目指していきます。

① 秋冬ネギの収量向上 (気象災害に対応した白ネギ栽培)

昨年は、大雨災害の影響で秋冬ネギの反収が 500cs/10a と非常に低くなってしまった。

【改善策】

- 水害に強い品種を選定する。
- ユンボ導入し、圃場の排水対策を行う。
⇒畑での水害によるロスが減り、反収 UP

② 育苗スペースの不足

現在の間借りしている育苗ハウスでは、目標年の面積を達成するには育苗数が足りない上に、間借りしているハウスが使用できなくなった。

【改善策】

- 育苗ハウスを2棟導入し、規模拡大時の面積に必要な苗数の育苗を実現する。
⇒規模拡大への問題がなくなり、規模拡大が可能

③ 播種作業および資材保管の不足

現在、播種の作業場所も資材の保管庫も間借りしているが、そこは返却の必要がある。また、資材の保管場所も、複数の農家から倉庫を間借りしている状況で、作業時間や移動時間にロスが生じている。

【改善策】

- 営農拠点である崎津エリアに育苗ハウスと格納用ハウスを建てることにより、移動時間の短縮や拠点の集約による効率化を実現する。

⇒拠点集約による効率化で反収 UPと規模拡大

④ 各エリアごとの圃場の特性及び農地の分散

現在、引退した農家からたくさんの農地を紹介いただいているが、荒廃農地も多く、すぐに利用できない。荒廃農地を整備することで農地の集約化にもつながるが着手できていない。

【改善策】

- ユンボを導入し、荒廃農地を開墾し、集約する。

⇒農地集約による効率化で反収 UPと規模拡大

⑤ 雇用の不足と数年後の雇用体系問題

自身の加齢による作業効率の低下と、今後、父の高齢化による引退が見込まれる。

【改善策】

- 雇用を増やす。
- 雇用した従業員のように、作業マニュアルや施肥計画、防除計画が充実させる。

⇒労働力の増加による反収 UPと規模拡大

